

入選

人と人をつなぐバトンリレー

千葉県 和名ヶ谷中学校

3年 瀧澤里帆

ガタン、ガタンと静かに揺れる車内。修学旅行の班別行動でとても疲れていた私は、友達といっしょに座席に腰を掛けていた。あと2駅くらいになったときだった。車内の扉が開くのと同時に、中国人の家族が入って来た。子供たちやお母さんは座席に座ることができていたのだが、お父さんらしき人は、座席がもう空いていないのかずっと立っている状態だった。

席を譲ろうと決心したのは、少し経ってからだった。断られたら気まずいし、何より外国人というのが、私たちにはハードルが高かった。でも、勇気を出して立ち上がり、「この席、どうぞ。」と身振り手振りで伝えてみた。私の心臓が大きく脈を打つ。ドキドキドキ。だが、そう思っていたのもつかの間、呆気なく断られてしまった。

中国語でも、遠慮されているのがよく分かった。すごく気まずくなって、「声なんて掛けなきゃ良かった。」と心の中で何度もつぶやいてしまった。あと1駅くらいで着くはずが、私には長時間の長旅のようだった。

電車で揺られて少し経った頃、中国人の家族の1人がスマホに向かって一生懸命しゃべりかけていた。何度も何度も、翻訳アプリにしゃべりかけては消しての繰り返しだった。私は、「もしかしたら、私たちのために、翻訳してくれているのかも知れない。」と心のどこかで思っていた。そう思うと、また少し気まずくなり、私の頭は申し訳ない気持ちでいっぱいだった。

そして、目的の駅に着き、私たちが降りようとした、そのときだった。中国人の家族が、たくさん翻訳をやり直したであろう、日本語の文面を私たちに見せてくれたのだ。そこには「私たちも、あと1駅くらいで降りるので大丈夫です。ありがとうございます。」と書かれていた。それを見た瞬間、私はすべてのモヤモヤが晴れた気がした。

さっきまでの不安や罪悪感が、この一言のおかげでなくなり、私たちがしたことが決して無駄ではなかったように思わせてくれたのだ。心がとても軽くなる以上に、私は胸がいっぱいになる感覚を覚えた。そして私たちも、感謝の思いを胸に抱いて精一杯お辞儀をした。私たちは、たくさんの感情が芽生えた車内を後にした。

「親切」というのは、言語が通じなくても相手に自分の思いを伝える1つの手段になると思う。だが、自分が親切で行った行動が、思わぬことになってしまうこともあり、すべてがすべてうまく行くとは限らない。でも、あまり自分を責めないで欲しい。

今回のように、その行動自体はうまく行かなくても、親切心という思いは相手に伝えることが出来るのだから。その思いが、国境を越えてもなお、人々を1つにつなぎバトンリレーのように世界中に親切を溢れさせることができる。

だから私は、今日も親切というバトンを誰かにつないでいこうと思う。